

畑谷の村々

参照、五萬分一地形圖「北小松」

小牧實・繁

江若鐵道北小松驛下車西北楊梅瀧を右に見ながら急坂八町を登ると一本の赤松の太木の立つ涼み峠⁽¹⁾に出る。涼み峠から平坦な高原を横切つて尙ほ行くと「右畑道」と記した石標が立つてゐる。畑道とあるので本當の畑道かと思ひ違ひをして左するため山道に踏み迷ふ人も少くはないとか。右畑道をとつて熊笹の生え茂つた所々に赤松などのある快い高原を尙ほ進むと寒風峠⁽²⁾に立つ。高原の北端に當り、それから下り道となる。小松村と高島村との村界であり、同時に滋賀・高島兩郡の界でもある。それから十町ばかりの坂道を下ると高島村大字鹿ヶ瀬⁽³⁾の小白ヶ谷である。即ち今吾々の問題としようとする畑谷に入つたのである。

部落の南外れから西南武奈ヶ嶽⁽⁴⁾の方向に上流に溯ると「八池淵」の瀧があり層々深潭の間に數多の飛瀑がかかつて隠れた景勝をなしてゐるが今筆者はそれに就いて細説しようとしてはゐない。本稿では主として畑谷⁽⁵⁾、即ち鴨川上流⁽⁶⁾の村々の生活、殊にその山村的生活の記述をなすを目的としてゐる。

小白ヶ谷⁽⁷⁾には家が十四、五軒ある。生業は農が主で炭焼さを内職とする。炭焼さには武奈まで行く。

が、それは朝五時半に出て夕方八時に歸る日歸りの山稼ぎである。手間をとるためであるから寢宿りしたのでは何にもならない譯である。

鹿ヶ瀬には家が三十軒あるが、三、四軒は中溝（黒谷のうち）へ出てゐる。寺は眞宗である。⁽⁷⁾

黒谷には家が四十二、三軒あるが百姓が主で、うち七分は副業に炭焼きをやる。大體八、九反乃至一町二、三反、平均一町歩ばかりの田を有ち、米は自家用のミヅグルマで搗き、餘る分は大溝へ出す。また鹿ヶ瀬・黒谷の米は二十年程以前はこの谷と山一つ隔てた安曇川上流の村々、栃生・細川などの女が七七一米の峠を越して半俵づつの荷で背で持ち歸つたものである。⁽⁸⁾

耕作には牛を使役する。牛は一戸に一頭は必ずゐる。但馬から二、三才で来るもので、大體二年位置いて四、五、六才で出す。但馬の買元と交換することもあるが博勞が來て交換して行く方が多い。四十圓乃至百圓も入ることがある。牛は全部牝牛を使う。（高島村のうちで大字高島には牝牛十頭、牝牛十頭、馬十頭位がある。大體牛が七分であるが、黒谷には鹿ヶ瀬・畑に於けると同じく牝牛のみが飼はれ牝牛も馬も全然ゐない。）

炭も同様大溝へ出る。二、三十年前には牛の背で山を越して小松の方に出したが、今は牛車やトラックで大溝へ出すのである。鹿ヶ瀬は武奈方面に山があるのであるが、黒谷は朽木村との境に山があり（多くは部落持で、個人持は少ない。個人持山は部落に近い所にあり部落持山は奥の方にある）矢張り日歸りで焼くのである。黒谷だけで八〇〇乃至九〇〇俵を賣り出す。材木も若干はある。鹿ヶ瀬は土地が悪く松一式であるが、黒谷には松杉に檜もある。

氏神は村社松尾神社⁽⁹⁾で中溝との間(黒谷字三本木)にあり、その他尙二個所に小祠があり、寺は本派本願寺派⁽¹¹⁾で部落のうちにある。

黒谷全體(中溝を含む)では以前は家が八十軒もあつたが今は六十軒に減じてゐる。多くは京都へ出たのである。家が減じかけたのは二、三十年以前からのことで、今京都の吉田町邊には此の部落から出たものが二十軒位はあるであらう。多くは職人とか商人とかなどになつて働いてゐる。⁽¹²⁾家に關しては洗場にミヅヤがあり、冬はイルリで暖をとり、またその上で炊事もするのであるが、イルリにはカナゴ(五徳)を置き、上にはアマが懸かる。

鹿ヶ瀬(小白ヶ谷を含む)にも黒谷にも山の神はない。山の稼業はするのであるのに山の神がないのは些か奇異の感を起させる。水の神も野の神もない。氏神があるばかりである。(宗旨の關係によるのかも知れない。)

中溝は黒谷のうちで、家が十七、八軒乃至二十軒ある。或ひは十四、五軒ともいふ。生業は農が主であるが、副業にまた村の山を買つて炭を焼く。併し中溝には寧ろ農村的色彩の方が強い。

氏神は黒谷との間(黒谷字三本木)にある松尾神社で、寺は黒谷・鹿ヶ瀬及び畑にある。

家屋の東北側に杉の立木を有する家がある。北東風が強いのもあらうか。それは兎も角として中溝の部落は家居の情態などから見ても鹿ヶ瀬・黒谷、後述の畑などに比して一段と貧弱のやうに見える、新村らしい感じを與へる。

これはまた事實らしい。氏神は部落の中にはなく黒谷との間にあり、寺も鹿ヶ瀬・黒谷、また畑に

あるのであつて、中溝が鹿ヶ瀬・黒谷・畑などから出た家々の集まりであることは事實らしい。土地の人達もまたかく考へてゐる。

併し新村といふことを言へば、小白ヶ谷も黒谷も鹿ヶ瀬自體さへもが餘り古い村ではないらしいのである。小白ヶ谷が黒谷と共に鹿ヶ瀬から出たものであることは殆んど確かで、黒谷からは向出と呼ばれてゐる。そして鹿ヶ瀬自體も非常に古い村ではないやうに思はれる。その氏神は黒谷と中溝との間（黒谷のうち）にあつて部落の中にはないのであるが、その氏神に畑の氏神、村社八幡神社の森程の立派な立木のないことなどから鹿ヶ瀬自體も畑と比較すると新村であるのではないかなどと考へられる。鴨川上流の一帶（三谷とも云はれる）が畑谷と總稱せられるのを見ると、この谷の部落間では畑が最も古いのではないかと考へられる。前記の八池淵の如きも畑の八池とか畑のハチ瀧とか此の土地では言はれてゐるのである。尤も畑のことを奥畑とも言ふが、これは後の呼稱であると思はれる。

然らば畑とは如何なる聚落であらうか。

畑の寺では島津外記なる人が落人として此の土地を開いた、寺は始めは比叡山の勢力範圍内にあり天台宗であつたが蓮如の時から大谷派の眞宗に改めた、以前はなほ上の方にあつたのであるが火災のため二百年前此の地に移つたのである、寺の紋にも島津家と同様の田を用ひてをり代々島津家が住職であると云ふ。

併し部落の人達は、書物は焼けたといふが元來此の部落は關ヶ原の戦後島津の殘黨の開いたとこ

ろであるとも云ひ、また、林五郎左衛門といふ人が寺にゐたとも云ひ、或ひは單に浪人が來て此の部落を開いたとも言ふのである。要するに正確なこの村の起原は不明と言ふの外ないが、此の村が柳田先生の言はれるやうな起原の村、⁽¹⁶⁾少くとも部分的にさういふ性質の村であることは略確かである。村人は黒谷は新しいと言つてゐる。今は林・西澤などいふ姓を名のる家が多いが、三村・三上などの姓を有するものがあり、そしてそれ等は元來は共に三條と稱したといふから由緒ある村に違ひはない。

畑には家が四十七、八軒あるが、生業は山半分農半分である。山稼ぎは材木と炭とが主であり、材木(松・杉・檜)は畑の山の木を大溝に出し、(一軒西澤善六氏が村で製材をやつてゐる、動力は水力)、炭は朽木村境の山で、また朽木の山を買つて焼き大溝方面へ出し、朽木に近い方では朽木村村井の方へ出す。シデ・ホス・ナラ・ブナ・トネリコなどの雜木を大正式或ひは在來式(その比は半々である)の竈で焼き二貫俵にして出すのである。何れも黒炭^{クロズミ}で白炭^{シロズミ}は燒かない。

田は部落の低い部分のものが既に山田であるが、村の人々が山田と稱するものはそれこそ非度い所にあつて都會人には一寸想像もつかないのである。畑の氏神村社八幡神社⁽¹⁷⁾のある所が丁度海拔三〇〇米であるが山田のあるものは五〇〇米を超えてゐる。何れも石垣で築き上げた段々田であることは言ふまでもない。そして其處には肥料小屋^{ゴヤ}があるのみで寢宿りはできず日歸りで耕しに行くのである。(使役牛は但馬牛の牝牛である、尙ほ此の地でも牛小屋のことをマヤと稱するから以前は馬が用ひられたのかも知れない)稻は刈つて其の場で一週間ばかり乾しそれを納屋にとり込んでこく

のである。畑で食ふ丈けはとれる。

畑の聚落自體が既に山田の中にあるのであるから、猪垣はあるのだが秋は猪が稻を食ひに出て仕方がない。昔は松明を棹に吊して田のヘヅラ（縁）に立て猪を追つたもので、遠い山田の方では今でもそれを實行するものがある。即ち松明をくすぶるやうにして夜明けまで置くのである。また昔は猪おとしあなを作つて置いて猪の害を防ぐと共に猪を獲つたものである。猪を突くには猪突き槍を使つた。今は猪の害を防ぐためには當番で猪番に出ておどしの鐵砲をうつのである。現に筆者が踏査の夜も時々山家の寂寞を破つて空砲の山田に響き渡るのを聞いたのである。猪垣は畑では木の杭を立て並べた式の貧弱なもので且つ餘り多くもない。

家は各戸石垣を築いて傾斜地の上に平地を作つて建てられてゐるのであるが、傾斜を利用してガツタリ或ひはミヅグルマ式の水車を作りそれで米を搗いてゐる家が多い。多くは洗場にミヅヤを有する。

畑谷一帯にさうであるが、畑には養蠶が行はれない。桑が無いからだと言つてゐる。

此の地も雪國の範疇に入るのであつて雪は毎年平均四尺は降る。家にも瓦葺ならば雪止めを作つてゐる。畑谷一般は毎年平均三尺で、四尺は大雪と言はれるのであるが、畑では更に一尺多くなる。先づ四尺といふのが動かぬところである。今年（昭和八―九年）は畑谷一般に五、六尺降つたといふから畑では六、七尺降つたといふことになる。五尺の雪では仕方がない。雪が深いので十二、三年前まではフカグツを用ひ、それは今ゴム靴に代られてゐるが、ツマゴにカンジキは今尙ほ用ひられて

ゐる。雪が三尺にも達する時にはツマゴにカンジキをかけるのでなければ働けぬ。一例が、これを用ひれば猪にでも追ひつき得るのである。猪にはカンジキのやうな雪具がないため脚がこぼく雪の中にはいつて速くは走れないのである。

何にしても冬は雪が深いので三月一杯は遊びで、草履をあんまり藁むしろを織つたりテンゴを作つたり(材料は藁)するに過ぎぬ。五月初めになつて田を始め十月一ばいかかつて穫り入れをやり三月末から十二月一ばいのその農閑に山稼ぎをやる譯である。冬は圍爐裡の生活と言へるだらう。蒔柿を藁にさしてア、マの上に乾したのをア、ボシと言ふが、そこでア、マボシが嚙られたりするのであらう。尙ほ、イロリの席のことを言ふならば、臺所の棚に近い方がタナ、モトであり、その向つて左側の庭に近い方がヒ、タ、キ、バである。他の二方には名が無いやうである。爐の中の五徳はカ、ナ、ゴ、サンと呼んでゐる。

田の稻に關連して猪のことを言つたが、何しろ山家であるので、出るのは猪のみではない。熊が柿などを食ひに出ることがあり、毎年秋になると二頭位はとれる。また兎が冬軒下の菜葉などを食ひに来ることもあり、狐も出る。猿は朽木の山からこちらへは餘り出ないが山には三〇頭もが群をなしてゐることがある。最も多く出るのが猪で、畑谷全體で毎年二〇頭は獲れる。魚では、四年程前から伊黒より八瀧に至る鴨川に鮎を放流して、從來の鮎漁は一層豊かになつた。また五月から九月一ばいにかけてはイ、モ、イ、ヲ、がとれる。

村の生活では山稼ぎが重要な要素をなしてゐるので、畑にも矢張り山の神の信仰が残つてゐる。

氏神は近江名木誌⁽¹⁰⁾にも出てゐる位の杉の太木を有する村社八幡神社(新五月五日が祭)であるが、そこに山の神といふのが祇園祠などと共に合祀せられてゐる。元來は獨立の祠を有してゐたもので、舊二月九日を祭とし、神酒とおはぎ餅とをあげ大字高島から神主に來てもらつて拜む。山に稼ぐので感謝の意を表するのであるといひ、山の神はその日に種を蒔くといひ、その日は山に入れぬなどといつてゐる。

併し此の村は「畑」の地名が物語つてゐるやうに元來は山の村よりも田の村更に溯つては畑の村の性質を多分に有つてゐたのではないだらうか。田の蟲送りとか麻祭^{アサマツリ}などいふものが残つてゐるのがそれを傍證するやうである。

蟲送りは六月の日は不定であるが一日氏神さまの御光^{ヒカリ}をもらひ松明をつけて田道を通り田のない所に至つてそれを捨てると田の稻の蟲を送ることが出來るとしてゐるのである。

麻祭は更に明瞭に畑^{ハタケ}が當初畑^{ハタケ}の村であつたらうことを物語つてゐる。麻祭といふのは六月の第二の卯の日に赤のこはめしを作り神酒を上げて神主に參つてもらふのであるが、これは畑谷では畑の部落丈けにしかなく、その日は他の部落の親類知己なども招かれて來るといふ譯になつてゐる。昔或る時畑の部落だけが麻に蟲がついて穫れなかつたがこの祭をしてからまたよく穫れるやうになつたと傳へられてゐる。またそれを卯の日に行ふのは、兎は麻が嫌ひである故だと考へられてゐる。

麻は此の部落では今も尙ほ多く作られる。四月半ばに種を蒔き、七月末根から引き、それを蒸してア、カ、ハをばぎ、それに灰を入れてたき、川の流れ水で洗つて白いをとなし、それを婆さん達が

引き裂いて車でよつて糸となし、染めは他でやらせるが染糸をまた家で織るのである。

要するに畑は由緒ある古い村らしいが今は宗旨なども、高島村のうちでも拜戸に禪宗があるのみで畑谷全體が眞宗となつてゐるやうな譯で、縁組なども字内だけでなく外の字との間にも行はれてゐるやうな次第で、さう他の村と異つた點なども多くは残らず、否娘なども出る一方、更に村全體としても京都あたりへ出る一方で、それ等の人々との交通からも色々新らしいものが容赦なく入込んでゐる。それと一方滋賀郡坂本村五軒町の間人達や下阪本村比叡辻の人達やも多く畑の木出しに來るのであつて内外の交通が少い譯ではない。寧ろ驚くべき人間の動きの複雑さがこの僻遠の山家に於いてすら想像されるのである。筆者の踏査に快く一夜の宿を借されたこの村の西澤善六氏方には老新三夫婦が生活してゐるのであるが、その爺さんは二十五才にして若狹熊川村の木挽ツビキであつたものが西澤家へ入婿となつたものであり、當主善六氏の嫁さんの姉は京都北白川へ行つてゐるが、その家が北白川に出てゐるのは若狹高濱の出身とかいふ北白川牧場主某氏の手引であるといふのである。

併し古生層の岩石の露はれた何となくすんだ山峽の奥、山の懷に隠れたやうなこの村には未だ多くの古めかしいものが残つてゐる。外觀的なものにも人々の心の中にもさうしたものが隨所隨時に認められるのである。高く築かれた石垣の上の家居の前庭、ウマヤゴエを作るマヤの近くに多くは棗の樹などを植ゑて牛を繋いでゐる一角から田毎の月を瞰下しなほ仰いで後林に續く山田を見上げる景觀は通りすがりの旅人の心をも引かないでは措かないであらう。またその朴訥な村人の親切

やものの考へ方などには輕薄な都人士と雖も深い感激を覺えないでは居られないものがある。

中溝の北方、富坂の南方に當り五萬分一地形圖にも記されてゐる二軒の民家がある。これは宮川氏の母屋隱居二軒であつて伊黒(今の高島村大字高島の舊名)からの新開^{シンダイ}である。鴨川左岸の段丘上にあつて元來はガサハラであつたものを宮川氏の先代が二町ばかりの田地に新開して家居したのである。宮川氏の祖母(現在生存してゐたならば昭和九年の現在で九十九才である筈)が生れた時に此の家の壁が塗れて生乾^{ナマ}きであつたと傳へられてゐるのであるから、先づ百年前の伊黒からの新開であることに間違はないであらう。氏神も寺(眞宗西本願寺派)も伊黒にある。小字をツヅラと稱してをり、田圃の水は谷から引いたのである。家は二人の娘に養子を迎へて母屋隱居の二軒になつたのである。筆者の訪れた一軒は裕福らしい立派な構への家で、突然の風來坊にもどつさり砂糖を入れたハッタイノ粉を振舞つて呉れるといふ鷹揚な氣風の家で、茲には差し當り戸口の減少などは見られないであらう。裏山もあつて副業に薪をとり炭を焼くことも出來、それを高島の方に出しもするのである。

此處にも猪は出るらしく田のヘヅラに松明のたかれた跡が見られ、また縦に木の杭を立てそれに三段の横竹を結びつけ網などをかけた猪垣が作られてゐるのである。

富阪は伊黒の出戸^{デゴ}であつて伊黒の新田^{シンデン}といはれてゐる。併し新田にしてもツヅラ程に新らしいものではなく家は十七、八軒に達し、既に獨立の氏神を有してゐる。村社玉津島神社^{タマツシマ}がこれである。新曆四月十日(祭神十日蛭子であるため)が祭であつたが、神社合祀時代から後、五月五日が祭と定

められた。(この神社の由緒を信ずれば此の村へは畑村からの移入民も來たやうである。)またこの部落には現在も寺もある。本派本願寺派の願證寺⁽²⁴⁾がこれである。

此處でも尙ほ雪は深いらしく、カンジキを家の側に吊してゐるのが目につく。一本の細木を楕圓形に曲げて作つた式のものである。

各戸のミツグルマは殆んど認められず寧ろ大きな水車^{スキシヤ}が見られる。

大笹は百年程以前の伊黒の出戸^{デゴ}で伊黒のう^デちと言はれてゐる⁽²⁵⁾。元來は家が四、五軒あつたが今は減じて一軒となつて終つた。

伊黒⁽²⁶⁾は畑谷の谷口聚落と見ることも出来るであらう⁽²⁷⁾。そして確かに山村らしくなることも事實である。併し尙ほ山の神の信仰が形骸だけでも止めてゐるのである。立派な一本の黒松の古木を有する天満宮或ひは天神(無格社)⁽²⁸⁾といふのが山の神とも言はれてゐるのである。鴨川の谷を出て伊黒の聚落に入らうとする街道の左側に見るのがそれである。或ひは山の神は天神に合祀せられてゐるとも云ふ。後の説の方が正しいのであらう。山の神は寧ろ天神祠から少しく離れた上述の松の古木と關係があると思ふ。祭は五月十三日であと祭といふ。(氏神としては別に日吉神社があり五月五日が祭である)⁽²⁹⁾

何れにせよ現在の村の外観などからしても伊黒を畑谷の村々、山村らしさを多分に有するそれ等の村々と同一の類型のものと見ることは出来ないであらう。

(昭和九年十月十四日稿)

【註】(一) 住友山岳會の近畿の山と谷 一八六頁による。

(2) 同書 一八七頁による。

(3) 近江國輿地志略卷之九十二 高島郡第一に

檮ヶ嶽 八池山より廿町許西上にあり。此嶺は此邊の高山にして比良山に並べり。絶頂に至る時は、若狭一國服下
下にある。とあり、

琵琶湖志 第九 高島郡部に

檮ヶ嶽 又武名嶽にも書せり鹿ヶ脊村より登るを本道といへり高山なり奥に至りては比良山の峰ついきなりといへり。とあり、

近江名跡案内記 三〇六頁に

檮ヶ嶽 八池山ノ西二十餘町ニアリ此山ハ高嶺ニシテ比良山ト並ヘリ絶頂ニ上レハ若狭一國及ヒ江州北郡ハ眼下ニ見ルヘシ。とある。

(4) 近江國輿地志略 卷之九十二 高島郡第一に

八池瀧 畑谷の上八池山にあり。因て瀧の名とす。蓋瀧の落る坪八ツあり。故に八池瀧と云。亦山の名とす。とあるものである。

(5) 琵琶湖志 第九 高島郡部に

畑谷 鹿ヶ瀬村 畑村 飛坂村 黒谷村 須川村
とあり、

近江名跡案内記 三〇五頁に

畑谷 鹿ヶ瀬村ノ西南ニ二里餘ノ深谷アリ鹿瀬・飛坂・黒谷・須川ナト云フ所アリ又畑村ト云フ山村アリ。とある。但し村名には今若干の變遷が見られる。

(6) 湖路銘誌に

加茂川 高島郡大溝ニ在、上ニテハ八田川ト云とある。八田川は畑川であらう。

(7) 高島郡誌 二四一頁に

畑谷の村々

淨願寺 大字鹿ヶ瀬に在り、眞宗本派。元は天台宗、開山宗念、正暦三年此寺を創立す。寛正二年改宗す。
とある。そのまま信用すべきや否やを知らぬが、参考までに録して置く。

(8)

高島郡誌 六五—六六頁に

此村(小牧註 黒谷)より朽木畑村への道路は天保年間畑の平兵衛と黒谷の半右衛門三五郎長七等と開鑿して以來、炭・杉皮・細工物・板・杭の類追々大溝町に出でしと云ふ。

とある。それ等の土産を持つて出て歸りに米を持つて歸つたのであらう。

(9)

高島郡誌 一五〇頁に

松尾神社 村社。大字黒谷字三本木に鎮座す。黒谷の氏神なり。祭神大山咋命。例祭五月五日。
とある。

(10)

高島郡誌 一五〇頁に

熊野神社 大字黒谷字中島に鎮座す。祭神大山咋命。 大國主神社 大字黒谷字小谷山に鎮座す。祭神大國主
神事代主命。例祭六月二十日。
とある。

(11)

高島郡誌 二四〇—二四一頁に

慈敬寺 大字黒谷字中島に在り、眞宗本派。 第六世の時文祿元年永田村青冷寺に草庵を開き慈敬寺と稱し嫡男
を居らしむ。明治七年現地に移轉す。
とあり、

また 同郡誌 二四一—二四二頁に

本願寺説教所 大字黒谷に在り。 元文四年正月黒谷村三十八戸の門徒本願寺に歸参したりしかば直末として琳
明寺預けとなり、琳明寺住職は信徒と協議して翌五年五月一の道場を創立せり、明治十三年四月今の地を相
して本堂を再建す。
とある。

(12)

高島郡誌 六五頁に

鹿ヶ瀬^{シシ} 枝郷に中溝・黒谷・小白ヶ谷あり。享保年中の家數百二十三戸。

とあるが現在の鹿ヶ瀬・中溝・黒谷・小白ヶ谷の戸數合計は享保の百二十三戸にも及ばない。

(13) 高島郡誌 六五頁には

鹿ヶ瀬 枝郷に中溝・黒谷・小白ヶ谷あり。

とあり、同六五—六六頁には

黒谷 元は鹿ヶ瀬の枝郷なり。明治五年戸籍法施行の際獨立せしめしものなるべし。

とある。

(14) 近江國輿地志略 卷之九十二 高島郡第一にも

畑村 畑村と云は惣名にして、凡二里許の深谷也。因て畑谷共いへり。鹿瀬・飛坂・黒谷・須川など云るは其中の小名也。

といつてゐる。また高島郡誌 六六頁にも

畑 枝郷に須川あり。本郷を上畑、須川を下畑とも稱す。此溪谷二里許の惣名を畑谷といふ。鹿ヶ瀬・小白ヶ谷・

黒谷・須川等もその中の小名なり。

といつてゐる。

(15) 高島郡誌 二四一頁に

琳明寺 大字畑に在り。巨福山と號す。眞宗大谷派。開基教念。元天台宗の藥師院と稱す。丹州野瀬の人野瀬太郎は狩人なり、文明の末蓮如に遇ひて剃髮し教念と稱す。藥師院を改めて小庵とし、蓮如が興へし六字の名號を安置す。是本寺の草創なり。寛永十八年十一月五日木佛寺號許可、寛文三年坊舎を建立し享保十六年

四月本堂再建。其後回祿し、明和七年十二月に再建す。現今の堂宇是なり。檀家六十一。

とある。

(16) 柳田國男 日本農民史 一五頁參照のこと。

(17) 高島郡誌 一五〇頁に

八幡神社 村社。大字畑に鎮座す。畑の氏神なり。祭神應神天皇、天皇の皇子牟婁別王、畑村鳳嶺に父帝を祭

畑谷の村々

る、是本社なり。後年衣通姫を合祀す。某年衣通姫を富坂に分社し鎮祭す。例祭五月五日。
とある。

(18)

琵琶湖志 第九卷 高島郡部にも

當郡は北西に高山連りて雪國なり。
とある。

(19)

近江名木誌(大正二年) 一六一—一六二頁には高島村大字畑、神社境内の杉十二本、樺三本を何れも樹齡三〇〇年
と推定してゐる。

(20)

近江國輿地志略 卷之九十二 高島郡第一には

此谷中(小牧註 畑谷中) 寺社もなし古跡もなし。

と言ひながら、また

峨雲菴舊跡 畑山の頂にあり。古老傳て云。此所に庵あり。峨雲庵といふ。菴内に敕聞梅と號せる梅ありしと
然れども村老の傳るのみにて詳ならず。
とも言つてゐるのである。

(21)

近江國輿地志略 卷之九十二 高島郡第一に

禪智院 上拜戸村にあり。禪宗。伏見殿姫宮龍溪聖玉禪尼の開基也。御朱印百廿石の寺領なり。
とあり、また高島郡誌 二三九—二四〇頁に

禪智院 大字拜戸(上)に在り。尼寺なり。臨濟宗南禪寺派。

昌泉寺 大字拜戸に在り。曹洞宗。
とある。

延命寺 大字拜戸字宮ノ西に在り。曹洞宗。
洞源寺 大字拜戸に在り。曹洞宗。

(22)

高島郡誌 六五頁 伊黒の條にも

枚郷に富坂。大笹あり。享保年中の戸數富坂十四戸なり。
とある。

(23)

高島郡誌 一四九頁に

玉津島神社 村社。大字高島字富坂に鎮座す。富坂の氏神なり。祭神衣通姫事代主命。元畑村鳳嶺に祀りしを畑村の民此地に移り住み衣通姫を此に遷し祀れりと云ふ。例祭五月五日。

(24) 高島郡誌 二四〇頁に

願證寺 大字高島字富坂に在り。眞宗本派。明治十二年一月鴨村より現地に移す。

(25) 註(22) 参照のこと。

(26) 近江國輿地志略 卷之九十二 高島郡第一に

伊黒村 法泉坊跡 伊黒村にあり。今は園林となる。村老相傳。古昔伊黒法泉坊と號し、山徒にして此所の領主也。淺井家に屬して終に信長の爲に亡されて後吉武村に蜚居すと云。

とあり、
潮路銘誌に

伊黒 高島郡 法泉坊住城跡アリ。

とあり、

近江名跡案内記 明治二十四年 三〇五頁に

伊黒古城址 其址園林ト爲ル昔時山門ノ徒伊黒法泉坊此地ヲ領シ淺井氏ニ屬ス、而ルニ法泉坊織田氏ニ意ヲ通スレハ元龜三年四月淺井長政・海津長門守・淺見對馬守・山田順哲齋・赤尾與四郎・日根野彌次右衛門等ニ命シ、兵千三百騎ヲ率テ伊黒ノ城ヲ攻メシム、法泉坊城ヲ棄テテ逃走ル淺井ノ兵城ヲ破毀ス。

とある。伊黒は即ち高島村字高島である。高島郡誌 六五頁に

高島 舊伊黒村と稱す。明治十二年高島と改稱す。此地は往古の高島郷の地なりとして改稱したるなるべしと雖も、其高島郷たりし證左なし。校郷に富坂・大笹あり。享保年中の戸數百二十九戸、富坂十四戸なり。

とあり、同 六四頁に

高島村 伊黒村の地を高島と改稱し、是名を村名にも及ぼしたるなり。此地中古の高島郷の地なりと稱すれども

確かならず。

とある。

(27)

此の際筆者は必ずしも谷内の聚落が先づ發達してその谷口に伊黒の聚落が發達したといふことを言はんとするのではない。否、恐らく伊黒は畑谷の他の如何なる聚落よりも起原は古いのであらうと思はれる。聚落の起原と機能とが混同せられてはならない。何れにしても谷内及び谷口聚落の起原並びにその機能的關係に就いては更に今後の研究が必要であると思ふ。

(28)

高島郡誌 一五〇頁に

天満宮 大字高島字大町に鎮座す。祭神菅原道真。俗に徳宮と云ふ。

とある。

(29)

高島郡誌 一四九頁に

日吉神社 村社。大字高島に鎮座す。高島の氏神なり。祭神大山咋命。舊日吉大行事と稱せり。例祭五月五日。とある。

フィンランドの想ひ出 (一)

本間不二男

一、ポーランド

一九三二年十一月二日の朝八時三十五分一行はベルリンのツォーバーンホーフを出發してモ

スカウの旅に立つた。其の夜と次の夜とはワルシャワに泊り、四日の朝七時十分此處を立ち五日目の朝九時三十分モスカウの停車場に着いたの